

# 良い木陰、悪い木陰

友人宅の庭に茂るニーム（インドセンダン）の木陰で話に興じていたときのこと、皿にのせたカップをカタカタいわせながら紅茶を運んできた友人の母親がいった。

「木陰でのおしゃべり、いいわねえ。木陰はやつぱりニームが一番！ バニヤン（ベンガルボダイジュ）もいけど暗すぎる。タマリンドの陰は体に良くないわ」

木を、姿かたちではなくその陰で評価するとは、さすがに日差しの強烈なインドならではの思っただ。木の陰の良し悪しについて語るこんな話がある。

ある女が、長旅に出かける夫を早く帰らせたいと思つて賢者に相談したところ、賢者は女に「行く道はタマリンドの木陰で、帰り道はニームの木陰で昼寝をするよう夫にいえ」と告げた。

女は、賢者にいわれたとおり夫にいい、夫は妻にいわれたとおりタマリンドの木の下で午後の仮眠をとりながら旅をつづけた。すると数日のうちに病気になる、旅を断念して帰宅することになった。だが、帰りにはニームの木の下で眠つたので、家に着くまでに男の病気はすっかり良くなつてい

にしおか 直樹

プロフィール  
1946年宮崎県生まれ。宇都宮大学農学部卒業後インド西ベンガル州に留学。村々をめくり、昔話や植物の話を集める。著書に『インド花綴り』（木犀社）、『インドの樹、ベンガルの大地』（講談社文庫）、『サラソウジュの木の下で』（平凡社）、『ネパール・インドの聖なる植物』（八坂書房）、『サンタルの森のおおきなき』（福音館書店）などがある。

た、というのである。

効用が広く薬効も高いアーユルヴェーダの薬木ニームはインドでは知らない人はない。その陰までもが体を健康なバランスに導く力があると信じられているのである。一方、タマリンドはマメ科の高木で果実は食用となり毒樹ではないが、酸を含んだその葉が散る樹下にはなんの小草も育たない。陰惨な感じのするその木陰はどこか不吉な感じがするのである。

タマリンドよりもつと悪いのはシチヨウジュ（七葉樹）で、その木陰で眠ると死んでしまうときさえいわれている。キョウチクトウ科の常緑高木で、深く涼しい木陰を提供してくれるが、秋になって花が咲きだすと、その臭いがあまにも強烈なので、だれもがそこから逃げ出したくなる。花後に結ぶ莢（さや）が裂けて山姥（やまんば）の髪のように長くれたれ下がる。そういうことからだろうか、この木はシャイターン（サタン）と呼ばれて、西ガート山脈に住む部族の人たちはその陰を踏むことさえも嫌うという。こういう話を聞くと、私たちは、人のお陰（かげ）もさることながら、木々のお陰をもおおいに被（か）つて生きていくことに気づかされる。

月刊  
みんぱく  
1月号目次

1 エッセイ 千字文  
良い木陰、悪い木陰  
西岡 直樹

## 特集 ひつじ

- 2 ひつじが聖なる動物となる時  
——モンゴル・ブリアートのシャーマニズム儀礼  
島村 一平
- 4 ゴワゴワを活かす  
——ネパールの羊毛加工から  
上羽 陽子
- 6 現代に生きる古代の紙「羊皮紙」  
八木 健治
- 7 今年はヤギ年  
樫永 真佐夫
- 8 ニューゼaland、牧羊の二世紀  
ピーター・マシウス
- 10 集めてみました世界の〇〇  
門飾り編  
菅瀬 晶子
- 12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら

踊る獅子  
——埴田神社の青獅子舞  
笹原 亮二

16 多文化をあきなう

ソーシャル消費と認証制度  
長坂 寿久

18 味の根っこ

パーラ  
南 真木人

20 人間学のキーワード

サバルタン  
井坂 理穂

21 異聞逸聞

もうひとつの「東海」  
庄司 博史

22 制服の世界、世界の制服

箱根駅伝のユニフォーム  
日高 真吾

24 次号予告・編集後記